

インフルエンス
—あのことろの僕たち



真下魚名

「春休み、映画とか見に行かない？」

・・・という一言を、彼女にいえなかったことを、もう99回は後悔している。

今なら、何のためらいもなく言えるけどね。

断られようが、無視されようがなんとも無い。

でも16歳の僕は、その一言を言い出せなかった。

誰が見てもかわいくて、頭が良くて、黒いふちの目がねをかけていた。

誰から見ても、僕と彼女では釣り合いがとれなかった。

けれども友人として、僕たちは仲が良かった。

言ってしまうと、断られたときのことを考えて。

言わなくて、そのことをこんなに後悔するとは気づかなかった。

そのころは、多分、こんな日常はまだまだ続くと思ってたんだろうな。

「なあに、このマスコット。もらいもの？」

「あー、高校のときにね。」

勝手に引っ張り出すんじゃねー。

「へー、手作りじゃない。でもタヌキなんだ。おもしろーい。」

「ギターにつけてた。」

「未練たらたらだねえ。そんな純情なときがあったとは、いっがーい。」

絞めるぞ、てめ。

このマンションは学生専門で、長方形の部屋が鶏舎のケージのようにならんでいる。

僕がここで暮らしだしたのは、一年の秋からだった。

それまでは少し古びたアパートだったんだけど、隣の音が煩くてそこを出た。

多分隣の人が正しいんだろうとは思うけど、生活のリズムが違う人たちと暮らすのは難しいっていうことだ。

それから1年と半年近くたって、この部屋の天井にも随分馴染んだな。

二階のベランダから見えるのは隣のマンションだけだけど、夜しか居ないんだし。

ベランダから景色を楽しむぐらいだったら、学生会館の屋上の方が見晴らしはいい。

でも、まあ、なんだろう。

こいつみたいにあっちこっち興味津々て感じの“客”って初めてだな。

普通だったら、まあ人の部屋なんだし、眺めるだけにしときますかっていう、それが常識ってもんだろう。なに考えてんだか知らないけど、あっちこっち詮索してくれるよ。お陰で、思い出したくも無い後悔まで蘇ってきた。あれも、ちょうど春だったんだよな。

いまさらだけど、この“砦”だけは死守すべきだったのかも知れん。いくら、うつむき加減につま先視線で、“一度も誘ってくれないよね、センパイの部屋に・・・。”って横顔で言われたからといって、“ああ、じゃあ、一回ぐらいだったら”なんていうんじゃないかった。

あれ絶対演技だったんだ。

後悔っていうのは、先には出来ないけどな。

「この部屋、居心地いいね。」
はあ？

でっかい柱が天井の片側に通ってるし、見晴らしも悪いし、壁紙も白っぽいし、そんなにいい部屋じゃないぞ。だから安いんだけど。

僕にとってはもう生活の全てみたいなもんだから、たしかに居心地はいいけどな。

「そうかなあ？」
「うん。なんか、包まれてるって感じがする。」
六畳に二人居れば狭いもんな。
で、あとベッドだろ、本棚にちゃぶ台。これでいっぱいいっぱいだよな。

「あの写真、去年のグループ展に出してたやつでしょ。」
よく覚えてんな。僕なんか、人の写真とか直ぐ忘れるぞ。
だいたい、自分の写真が一番好きだからな。
だから壁なんか貼ってたりするんだけど、、、アイドルのポスターとかじゃなくて。

「あれ好き。」
そういわれて悪い気はしない。見る目持ってんじゃないか。
けど、前からおもってたんだけど、なんでオレだけタメグチ！・・・・なんてな。

「構図がね、私のイメージに似てるんだ。このモチーフだったら、わたしもこう描くだろうなって。」

「お前、去年出さなかつただろう。せっかくわざわざ見に行ってやったのに。」
というのは嘘で、部室が隣同士のよしみで仲のいいこいつらのサークル展を覗きに行っただけなんだけど。

一年で出さなかつたのは他にもいるんだろけどな。こいつはそういう感じじゃないって、思ってたんだ。いわゆる籍だけ置いてる部員じゃなくて。

だから、ちょっとな。

「私の絵は全然ダメ。」
見たこと無いからわかんねー。

「スクールで教わってきたことどおりのものしか描けない。モチーフも塗りも。
だから、サークル入って先輩たちの絵見てびっくりした。」
良く有る話だな。井の中の蛙、大海を、、、なんだっけ？

「へったくそで！」

「・・・お前なあ。」

「でも、自由でいいなあって憧れた。こんなの描いてもいいんだって。
それから腕が動かなくなっちゃった。」

「オレはがっかりしたけどな。お前の絵が見れなくて。」

「またまたあ、そういうこというと女の子が喜ぶと思って。」
あ、くそ、本音言って損した。完全にバカにした笑顔だな。

「でも、ちょっと嬉しいかも。」

「春のサークル展。ちゃんと描けよ。新勧もかねてんだから、二年が出さないと成り立たないぞ。」

「なに、その部長目線な言い方。人のサークルなんだから放っというて。」
その隣のサークルから、ウチの部室に入り浸ってるお前はなんなんだよ。

「絵は写真ほど簡単じゃないの。」
くっ、生意気いってくれる。

「そうだろうな。撮れないときが続いても、毎日カメラ持って出て、歩きまわってたら一枚、二枚っていうふうに溜まって行って、それを焼き付けて見つけるものってあるからな。

絵みたいに、真っ白な画用紙に向かうっていうんじゃなくて、まず対象が目の前にある。それを見つけられるかどうかだから。そこは違うんだろうな。」

なに、なんだよ。

「センパイってさ、時々いいこというよね。」

時々。

「その頻度が高いのもなかなか。」

頻度。

「かなり、褒めてんだけど。私にしては。」

そうは聞こえねえ。

ぜえったいに聞こえん。

「このCD、全然知らないのばっか。洋楽しか聴かないの？」

今度は音楽か。

「J-PopとかFMでしょっちゅう流れてるし、わざわざ買ってまで聞かないなあ。」

次から次へと・・・。

「えと、Talking Heads・・・変な名前一。そういうのばかりだね一。」

「聞くか？」

「うん一。でも、あんまり変なのはいやだね一。」

もちろん、接待用のはあるんだよ。お前のためのじゃね一ねけどな。

「Simon & Garfunkelがマジソンスクエア・ガーデンでやったライブ。」

「洗剤屋さんみたいな名前。」

ああ、確かにそんな外資の会社はあったさ。

でもなあ。どうしてそう、思ったことを口からぼろぼろとこぼすかな。

友達できね一だろ、それじゃ。

これも死ぬほど聞いたけどな。スタートボタン、ぐしっ！と。

「これ聞いたことあるかも・・・。」

「スカボローフェアだ。」

ん、気に入ったみたいだな。

“Are you going to”

どっかで桜が散ってるんだな。窓の外でひらひらと光りながら飛んでいく。
いい陽気だし、桜も散り初めていい雰囲気だし、こんな家の中でうだうだして
いるより散歩でもしたほうがいいのかもな。

でも、こうやって音楽聴いてるときのこいつの横顔も悪くは無い。
っていうより、なんか、構ってやりたくなる。

「あのさ、春休み、映画見に行かないか。」
なんだよそのでかい目。

「行く行く。でもホラーはダメだよ。あと暗がりに変なことしたら刺すからね。」
「しないって。」
「しないの？」
どっちだよ？

もし、あの時こんなふうにならなければ、今の僕ってなかったんだろうな。

あの時、僕は彼女と、何を見たかったんだろうか。

“ねえ、バイト代入ったし、晩ごはん一緒に食べない？”
おっとー。ここんところ中島食堂ばっかだったしな。

「オッケー。」

“じゃ、四条河原町の阪急前で待ってる”。
また、メジャーなとこだな。なんてとこ指定するんだよ。
まわり、女子ばかりじゃないか。

「で、何処行くの。」

「ジンギスカン。あそこのビルの5階だよ。」

あの、筆箱みたいなビルか。京都は家も細いけど、ビルも細いんだよな。

夕日がざらざらと当たってるんですけど。

でもって、エレベーターはもっと狭い。火事になったら逃げ場無いな、このビル。

「じんぎすかん？なんで。」

「誰かがね、美味しいって話してたの聞いた。」

いつか、その誰かの首を絞めてやりたい。ま、スポンサーの意向には逆らい
ませんけどね。

北海道のなんとかガーデンとかさ、露天の店ならまだしも、こういう天井の低い、
せまっちい店でジンギスカンて言うのどうなのかな。

「これ何？」

「ジンギスカン鍋」

「鍋？焼肉でしょ。鉄板とかじゃないの。」

「ジンギスカン鉄板て言ってみな。」

「ジンギスカン・・・、ジンギ・・・。おお、ジンギスカン鍋でいいです。」

“お待たせいたしました。セット二人前です。”

「じゃ、まず乾杯。」

「ねえ、この肉、なんか変くない？」

お前の日本語が変。ついでにいうと、箸の持ち方もなんか変だ。

「マトンだからな。羊。」

「羊さん？あのウールの羊？」

「そう。」

「・・・わたし食べれない。・・・肉上げるから野菜全部頂戴。」

「お前、知らないで来たのか。」

ってうすうすは、気がついてたけど。

「だって、こういうとこ一人じゃ入れないし・・・。」

しょうがねえな。毎度のことだけど。

「バイト何やってきたの。」

「コンパニオン。」

「はあ？」

「、、、ていうと聞こえはいいけど。」

いいのか？コンパニオン。

「あのさ、シールパックっていうの？タッパーウエアだっけ？そういうの持って、ピカピカした服着て立ってるだけ。」

「よくそんなのやったよな。」

一応煙は上のダクトが吸い込んでるんだな。

これだったら、服に匂いも付かないだろうけど、ダクトの中とんでもないことになってそうだな。あー、想像するのやめよ。

「トモダチに誘われてね。ギャラがいいからやんないかって。

6時間ぐらいニッコリ笑ってたてるだけだからって。」

「ご苦労さん。」

「ほんと、バカみたいなバイト。確かにギャラはよかったけどね、なんか大事なことに使うのがあほらしくなって。」

「それで、ジンギスカン？」

「うん。」

「オレって、アホついで？」

何だその目は。しかも箸止まっているし。

「上手いこというねえ。やっぱ、ヨータセンパイと来てよかったよ。」

くそ、なんか最近どんどん僕の地位が低下していったような気がする。

しかし、マトンとビールだけっつーのもなー。口の中が、油でぬるぬるしてきそうだ。

「キャベツちょっとくれな。」

もう、生でいいですから。

ジン、ジン、じんぎすかーん♪と。

「そう、それっ！」

これかよー。これのどこに、美味いって言葉が入ってるんだっ、つーの。

涙々……って指差すな、このバカ。

「明日の夜なんだけど・・・。」

「ん？」

「クルマ出せる？」

「ああ、いいけど。どして？」

・・・なんかいつもとちがうな。

普段だと、“ね、どっかいこうよ。”っていきなりなんだけど。

学生がいくら暇だからって言っても、明後日はカテキョーだから、ちょこっと準備もしないといけないんだよな。

今晚中に片付けておきますか。

「去年、友達がバイクで事故って死んだの。9号線で。お花持って行きたいんだあ。」

去年の今頃って、まだこいつと知り合う前だな。

男かな？男だろうな。なんかそんな気がする。

「なんか、変な想像してる？」

「してねー。」

「サークルの友達だったの。」

「聞いてねー。」

「・・・妬いてる？」

「オレは常に冷静だ。」

まあ、でも、あんまり穏やかなじゃないな。

二回ぐらい同じようなことが有ったっけ。

夏休みが明けたら、誰かがいなくなってる。

高校一年のときは、どっかのクラスの男子が校舎の屋上からダイブした。

大学も一年のときだった。田舎で酔っ払って水路にはまって、そのまま溺死したヤツがいた。その時、ああ、これは、小さなサバイバルゲームだなって思ったっけ。

僕たちは生きてるんじゃない、生き残ってるんだって。

9号線は、山の合間を抜けて鳥取まで続いている。

だからカーブが多くて、街灯も少なくなってくる。実質的にはこのクルマが

放っている二つの光だけが頼りだ。

いかにもバイク屋が走りそうで、事故りそうな道だな。

家の近くまで迎えに行っ、クルマのドアを開けてから殆ど何も喋ってない。
こいつがこんだけ無口なのも珍しい。

赤信号で止まるたびに、怖いぐらい静かになる。

「私、菊のにおいって嫌いなんだ。お葬式の匂いがするでしょ。
だから普通のぶーけにしちゃった。へんかな。」
こんな夜中に、いまさらブーケを買い換えるわけにもいかないだろう。

「いいんじゃないか。菊を葬式に献花するのって、匂いが強いからなんだよ。
事故の後に花束置いてくだけだったら、どんな花でもいいよ。」
「そうだよ。こういうの初めてだから、なんかまずいことしてないかなって、
ちょっと不安になった。私って、まわりのことあまり考えないでやっちゃうから。」

そのあと道は対向2車線になり、両側は植林された杉で真っ黒な闇になった。
京都に向かうトラックが多くなり、免許を取ってまだ1年とちょっとの僕は、
でかい車体とすれ違うたびに少し緊張する。

事故現場に行くのに、自分が事故に遭ってちゃシャレにならないな、
なんてことを思うのは、自分がただの運転手で、第三者だからだろうか。

テープじゃなくて、ラジオにでもすればよかったかもしれない。
ただ淡々と音楽が流れているだけの車内って、そう、まるでお通夜みたいだ。

「もう少し先だと思う。」

それからいくつかカーブを曲がって、あいかわらず口数がなくて、
街灯も無い真っ暗な闇の奥に、ああ、あれだな。まだ新しい花束と、
荒れたコンクリートの壁が照らし出された。

ウインカーを出し、少し先のところで路肩に寄せて車を止めた。

「一人でいいから。」

そうって助手席のドアを開ける。
夜の空気が、流れ込んできた。

バックミラーのなかで、手を合わせる彼女の姿と、ハザードのオレンジが明滅していて、そいつが誰だか知らないけど、少し感傷的になった。

「ありがと。」

「ああ。」

少し先に空き地を見つけて、クルマを一台見送って、ターンさせた。

当たり前だけど、光軸の奥に花束が一つ増えてる。

いやだな、こういうの。ここに縛り付けられるみたいで、と思った。

道路が広くなって、なんだか、肩の荷が下りた感じがした。

ただ、こいつを乗せて、花束を運んで、もう一度帰っていただけなのに、つめていた息を開放するようにほっとした。

深い黄泉の国から逃げ帰ったって言う、古事記の話思い出した。

「どんな人だった？」

ん？返事来ないぞ。どうした・・・、そんな顔して。

“私はまだ、かえってないよ”

そんな感じだな。

「本とは、にこ上の先輩で、面白い絵を描く人で、嫌いじゃなかった。

・・・そんな感じでいい？」

“嫌いじゃなかった”か。

そうだろうな。サークルの連中じゃなくて、僕に連れて行けって言うぐらいだから、何もなかったはずなんてないさ。

ああ、街の明かりが見えてきた。空が街の明かりで薄明るくなっている。

いつもは星が見えなくてげんなりするけど、今はそれが懐かしく感じる。

やっぱり、あんなところに縛り付けられるのは、嫌だな。

「もし、オレが事故っても花はいらないから。」

「そんなこというな、バカ！　・・・そんなこと言わないで。」

初めて本気で怒られた。

「あれ、修学旅行生だよな。」

うん。見かけない制服だ。

とか言って、このあたりの学校の制服を全部把握してるってわけじゃない。僕は地元民じゃないし。でも、なんとなく地域性って言うのあるんだろうな。それからは外れてるっていう感じがする。

前のほうに止まったタクシーから、制服がぞろぞろと降りてくるところだった。ちょっと詰め込みすぎじゃないのかと思うぐらい。

この先のでかい寺にでも行くんだろうか。毎日見ていると、寺も見飽きたな。地元の中学生ならなおさらだろう。

「そうだな。最近はグループで回るらしいな。」

「夕方の新京極とか、うじゃうじゃいるよね。」

いや、うじゃうじゃは居ないだろう・・・って、突っ込んだら細かいこというなっていわれるんだろな。あの辺り、修学旅行相手の旅館多いし。

学生課にバイトの張り紙あったっけ。あんまり面白そうなバイトじゃなさそうだけど。新撰組のはっぴとか買うやついるのかな。あとくだらねえ語呂合わせのTシャツ。そういや、小学校の修学旅行で、木刀買って没収されてたやついたな。

「修学旅行って何処だった？」

「信州。」

「それどこ？日本。」

「そうだよな、何が嬉しくて戸隠だよ。山と山と山。高山なんて、古臭い家しか無いし。」

「わたし沖縄。よかったよー、海青くて。砂は白いし。マリンスポーツとかね、面白かったあ。」

へえへえ、私立校のお嬢様はやっぱ行くところが違いますね。悪うございました。信州で。

「信州って何があるの。木？川？そば？」

くそ、オレの所為じゃないけど、むかついてきた。

「何で行ったの。」

「バス。」

「わたし、飛行機。へえーバスねえ。いかにも、修学旅行って感じでいいね。」

去年の北海道すら、一日半かけてフェリーで行ったのにー。飛行機だと。
このやろ、オレの弱点をつくの、なにか快感覚えて無いか近頃。
あのつまらない修学旅行の話は思い出したくも無い。

「まあ、バスもいいよね。歌集作ってみんなで歌うたったりするでしょ。」

「昭和40年代の映画じゃないんだから、そんなことするか！」

「席決めとか大変だよ。修学旅行なのにさあ、嫌なやつとずっと一緒だと面白くないし。」

「くじだよ、くじびき。あ、でも、帰りのバスが夜行だったんだけど、
座席に行ったらとなりが女の子に変わった。」

「はあ？変わった？ 何それ。」

「なんだって言ったら、まあ、いいじゃん、にこっ、とか。」

「それで。」

「うん？そのまま帰ったよ、なんかいろいろ喋りながら。
それまで、あんまり親しいってこともなかったんだけどな。」
「ほー。」

とかいいながらも、夜行バスってそんなに嫌いじゃない。

夜行バスって言うより、夜の長距離ドライブっていったほうがいいかもしれないな。
昼間みたいに景色が見えないし、ただクルマを走らせるって行為に浸れるのが楽しい。

途中のドライブインに寄ると、普通の場所では見たことのないうどんの自販機
なんか置いてあって、まあ、味はそれなりなんだけど冬場だと暖かさにほっと
することができる。

小袋入りの七味をありったけかけて、その如何にもチープな感じが好きだ。
そんなことこいつに言ったら、また連れて行って煩くいうんだろうな。
まあ、いいけど。

「それでさ、次の朝学校について、“寝顔かわかった”っていったら、
真っ赤になってた。」

「ふーん。その頃からそんなこと言って、女の子口説いてたんだ。」

「はひ？」

やばい。目がマジっぼい。調子に乗りすぎた。

「ねえ、ちょっとまじめに応えてくれる？」

「応えるけど、足痛い。」

「いいえ、痛く無いわ。今の私の心の痛みに比べたらぜんぜん痛くない。

その子の寝顔とわたしと、どっちが可愛い？」

「いや、まじ痛いつて。」

ってというか、今のオマエの顔と比べたら、あの子の方が可愛いなんて
口が裂けても言えない。

6 : 30に目覚ましを止めた。

昨日は夜更かししたわけでもないのに、目の表面がぱりぱりするように痛い。
学生の6 : 30なんて、さあこれから寝ようか、っていうタイミングだったりするの珍しくは無い。

ツレがやってきたりとか、読み出した本をやめれなくなったりとか、
写真焼いたりすることも。

無精をして、ポットに入っていたお湯でインスタントを溶かしたら、
舌の上に粉っぽい苦みが残った。

このごろはもう明らかに空気がひんやりとしてきた。

だからって言って、“秋だなあ”、なんて話を振っても“そうだね”なんてことは
絶対に返して来ない。

どっちかって言うとオジンくさ、見たいな目で見られそうな気がする。

自転車の前輪が明らかに平べったくなっている。パンクかなあ。

まあ、二時間もてばいいんだから、とりあえず空気入れよう。

この空気入れ、誰のかわからないけど、お借りしまーす。

のぼり始めたお日様の方向に向かって走り出す。

この時間帯に歩いているのは、犬とじいさんばあさんぐらい。

ここの道路は、学校に行く時間にはよくクルマで埋まってしまうけど、
今はまだがらがらだ。多分、その半分ぐらいは走らなくてもいいクルマなんだろうな。

いったいどれぐらい走れば着くんだろう。

もっと近くだと思ってたんだけど、電車で感じる距離と、自転車で実際に走る
距離って違うもんだ。まさか方角間違っていないだろうな。

と、思い始めたら、唐突に家の屋根が切れて、緑色の水平な線と青い空が目に入った。

ギヤをきしませながら、最後の坂を登る、登る、登る……。ふー。

川風と、水の光と、初めての風景だ。ご褒美としては上等だと思うよ、これって。

このまま堤防の上を走っても良いんだろうけど、でも、あの草むらの中に続く
道が誘ってる。

変速機もついてないこのチャリでどこまで行けるか解らないけど、まあ、山越えしたときよりはましだろう。

がたがたがたがた、ぽんぽんと石をはじく音、虫の声、光るススキの穂、一面にひろがるセイタカアワダチソウ、茂みからとびたつヒバリなんて初めて見た。どんどん上がっていく。ああ、もう見えなくなった。

道が草に覆われていく。ボクも草に隠れていく、、、ばきばきばき、ぐしゃ、ぎーーーー。

この草の壁だと、さすがにもう行き止まりだな。引き返そう。

でも、行き止まりにだって、何かの意味があるはずなんだ。

だって、ほら、振り返ると、眠そうな白い月が、黄色い堤防の上でまだぐずぐずしてるじゃない。

10:00

「ヤッホー、お待たせ。」

ヤッホーってなんだよ。山岳民族かよ。

「うーす。」

それと待たせんな、つつーの。いつものことだけど。

「あれ、またどこかに行ってきたでしょ。朝から元気だねー。」

「えー、何でだ。」

こいつ超能力者か。しかも、またとか。常習犯みたいじゃないか。

「だってほら、ポロシャツの肘。それ、ひつつき虫でしょ。犬並みの無神経さね。」
あ、ヤバ。

「どこに行ってきたんだか。あー動かないで、とってあげるから。」

「いーよ。自分でやるし。」

こんな人通りの多いとこでかっこ悪いし。

なんか、公園で母親に世話焼いてもらってるガキみたいじゃないか。

それに、、、

「だめ、私につけるつもりでしょ。」

・・・ 勘の鋭い女は嫌いだ。

「なに！」

・・・。

今朝、カーテンを開けたら空が真っ青だった。

ニュースでは気象予報士が放射冷却を連呼している。ようするに、
冷え込んだってことだな。

で、なんでこんな時間にこんなところを歩いてるかって言うと、
買い物に付き合わされたってわけなんだけど。・・・ちょっと腹減った。

「わあ、並んでるねー。」

「そだな。きれいに等間隔だな。」

毎度のことだけど、みなさんよくやるよなあ。

もう日が暮れかかっているし、寒いぞあれ。ユリカモメなんか思い切り風に煽られてるし。
パンくずかな、餌なんてやっていいのか、ばあさん？ 太りすぎて飛べなくなった
カモメとか、シャレになんないぞ。

「ね、いこいこ。」

「オマエ地元民だろ。あんなことして嬉しいか？」

「だってしたこと無いもん。」

ああ、もう勝手にサクサク階段下りてるし。しょうがねーなあ。

橋の上だと車がうるさくて、音が聞こえないけど、下まで降りると結構な
水音がしてるんだな。みんな、なんか楽しそうに笑っちゃって。

ここって日本の3大恥ずかしいスポットの一つなんじゃないかな。
後の二つがどこかは知らないけど。

うー、ケツつめてー。石の冷たさって、なんか氷とかアイスとかと全然違うよ。
人生の蹉跎を感じるような冷たさだ。

それにしても何の因果で、四条くんだりで・・・。

「どっこいしょ。」

どっこいしょ、言うな。

「知ってるう？ 河原に並んで座ると別れるんだよ。」

「あと、嵐山でボートに乗ったりとか・・・。」

「そうそう。」

なんてこと誰から聞いたんだろ。

よくもまあ、こういう根拠の無いことを人に教えるやつっているもんだ。

「三年坂で転んだりとか・・・。」

「あれは別れるんじゃないくて、三年後にあの世に行くの。」

「まあ、誰だって別れるし、いつかは死ぬんだし。」

生々流転、盛者必衰の理を、というほど大げさな話じゃないけどな。

祇園精舎の鐘の声だったかな。受験知識なんてどんどん忘れていくなあ。

「ヨータ冷たいなあ。」

「そういう意味じゃ、ないだろう。」

「そういう意味に聞こえた。」

悪うございましたね。気の利かない男で。

拗ねんなよお。女ってほんとに扱いづらいな。

・・・っていうか、いつのまにか付き合ってることになってるし。

そういう話って一度もしたことないぞ。

とかね。付き合ってるんだよな僕達って。

成り行きって言うか、なし崩しって言うか、そんな感じだけど。

まあ、水が低いところに集まって、流れて川になるように自然の成り行きとして、
っていうのは鴨川へのコジツケだけだな。

ひー、今強烈に風吹いた。顔の体温5度は下がった。

「さぶっ。」

あーあ、背中丸めちゃって。だから寒いって言ったろう・・・言ったかな？ま、いっか。

「ほれ。」

腕突っ込め。

「わーい・・・ヨータ、あったかーい。」

かつ、かわいい・・・。

だまされてるのかも知れないっていうのもう十分に分かってるけど、かわいい。

けど、こうやって数百、数千万の男たちが、星屑のように討ち死にして行ったんだろうなあ。

にしても、みなさん楽しいですか。かなり長い間座ってますよね。

「ん、どした。泣いてんのか。」

「わたし、高校ぐらいから周りはずれてきて、でも一生懸命調子ばっか合わせて、
・・・だから、ほんとはずっと一人だと思ってた。」

そんなとこまで、オレに見せるのか。

「自分が悪いんだって思ってた。」

見せていいのか。

「ヨータが居てくれて、よかった。」

そうだな、今はそうしとくしかないんだよな。

やばいな。かなり冷え込んできた。

もうすぐ12月だからな。

岩倉なんてもうすぐ氷に閉ざされて、凶徒バスがドリフトする時期だよ。

うわ、幻覚か、廊下をザクが歩いている。

アニ研もなあ、夜中までその格好すること無いだろう。

でもダンボールの中って暖かいかもしれないな。

ライターで火つけたら、もっとあったかいかな。

「センパイ。買出し行ってきました。」

「よし、ご苦労。」

「コーヒーどうぞ。それから、こういう人もくっついてきました。」

「よっ！」

なんでお前がここにいるの。

「ドッペルゲンガー、それとも幻覚？」

「本体だよ。失礼ねえ。」

「家は？」

「晩御飯食べてから堂々と出てきたよ。」

「何でつれてきたー。」

「いやー、東門のところではったり会っちゃって。いーじゃないですかセンパイ。華やかで。」

女子は泊まり禁止って言ったオレの面目はどうなる。

しかも、隣のサークルだし。あ、関係ないのか。別サークルってことは。

「夜のキャンパスって面白いねー。」

「今夜は特別だろ。前日祭もさっき終わったとこだし。」

「姐さん食べますか。ドーナッツですけど。」

なんでアネさん。

「おお、かたじけないねー。じゃ、遠慮なく。」

メシ食ったばっかじゃないのか。別バラでも太るぞ。

「姐さん飲み物無いですねー。なんか買って来ましょうか。」

「じゃじゃーん。ポットにあったかいミルクティ入れてきたの。
あとでみんなで飲んでね。と、これ紙コップ。」

そんなの持ってきたのか。そのためか？

「なんか、叫び声みたいな聞こえるね。」

「みんな浮かれてんだよ。年に一度の祭りの夜で、それなりに準備したからな。」

「学生っぽい。」

「そうだな。」

なにやってんだろうな、僕たち。こんなところで、こんな時間に、長いすに
座って話さなくてもさ、いつだってあったかいところで話できるのにな。

「家出てくるとき、怖くなかったか。」

「ぜーんぜん。だってコンパとかあったら10時、11時って時間になるし。」
それはそうだな。

「でもね、方向が逆だからだと思うんだけど、ちょっとどきどきしたな。
家に帰ったら安心、ていうのと、それから出て行くって言うのだと、ちょっと違う。
やっぱりちょびっと怖かったかな。」

無理してんじゃねーぞ。

「泊まり番っていったけど、こういうパネルって、とっていく人とかいるの？」

「いないだろうな。オレもただ泊まりたいだけなんだよ。」

「そうだと思った。みてこようーっと。」

子供かお前は。明日にしるよ明日に。

「ねえ、私の写真無いよ。」

「ばーか、人に見せたくないから大事に隠してあるんだよ。」

「こらー、そういうこというと喜ぶと思ったら大当たりだぞ。」

いやいや、女の子の写真をばーんと貼り出すような雰囲気じゃねーだろ。

にしても、息白くなってきたな。

「姐さん、毛布要りますか。」

「ううん、いい。12時過ぎたら帰るから。」

「大丈夫か？」

「タクシー拾うから。ヨータの邪魔はしないし。」

別に邪魔じゃあないけど。どっちかっていうと家の方が心配するだろ。

で、

「何しに来た？」

「ヨータと一緒に、日付を越したかっただけ。」

さいですか。

さぶー。鼻がもげるー。耳がちぎれるー。

この道路に沿って風が流れてるような気がする。

去年よりも遥かに寒い気がする。

「星、綺麗ねー。」

「うちの田舎はもっとすごいぞ。銀河だってみえる。あれがカシオペアでえ……。」

「ふーん。私ってさ、この盆地から出たこと無いんだあ。」

「ああ、来た来た。NKなら大丈夫だろ。じゃな、気をつけて帰れよ。」

「うんっ……。そーだ。」

ポケット？

「カイロ持ってて。私はもう要らないから。」

はは、善意なのか押し付けられたのかよくわかんねーけど、ありがたく頂戴します。

「あとさ……。」

「？」

ドア開いちゃったな。ほんとは、帰んなっていいたいんだけど。

「さんきゅー。」

「うん！」

なんだか酔っ払いが増えてきたな。

まあ、繁華街だし、そういう時間帯だってことだけど、・・・でもな。

「今日どうすんの。もう電車無いだろ。」

「うーん、楽しいから忘れちゃってた。泊めて。」

小首かしげて、ニッコリって、あのなあ。

「ホテルとか、とって無いのか。」

「ぶらっと出てきただけだし。」

マジですか。あのくそ田舎から、ぶらっとだと？

「京都観光したいって言うから、今日一日付き合ったんだぞ。」

「えー、こんな見ず知らずの土地に元カノ放り出すの。ありえない？」
まさかその軽装で、泊まるつもりとは思わなかったよ。

こいつ、ほんとにぶらっと出てきただけだったんだ。
童顔だけど、昔っからやることめちゃくちゃだからな。

「まさか、下宿に帰ったら彼女が居てびっくりとか。」

「そういうんじゃない！」

ボクは男でこいつは女だ。ヤバイぞオレ。ここは一つ理性総動員だ。出来るかオレ！

くそ。「タクシー！」

「へえー、いいところ住んでるんだね。おじゃましまーす。」

暖房切って出たわりには温かい。

「勝手に触るなよ。」

「へえー、へえー。」

コートかけるハンガーとか、有ったかなあ。えーっと、あ、これこれ。はいよっ。

こういうときに限って、後輩が来たりするんだよな。
さっき鍵閉めた音、ちょっとわざとらしかったかな。

「じろじろ見まわすな。コーヒー？紅茶？」

「紅茶。あ、これ自分で描いたの？」

「ああ。」

だから見るなっつったろー。といっても、あんなところに置いてあったら見えるよな。まだ描きかけなんだけどな。

「昔から器用だったもんね。美術の先生のお気に入りだったし。」

「それ、かなり昔。」

「だよー。」

中学生なんてもう遠い昔のことで、よくそんなどうでもいいこと覚えていると思うけど、何年かたって、再会して、でも結局別れた。

だから、突然電話かかってきたときは、かなり戸惑ったんだよ。いまごろ、何でこういうことになるかなって。

ほんと、なんで今頃なんだろ。

昼前に会って、昼飯食って、あっちこっち見て回って。よく喋ってたなこいつ。

僕は昔っから無愛想を絵に描いたような人間だから、ああ、とか、それで、ぐらいしか喋らなかったけど。いや、もうちょっとなんか話したよな、さすがに。

でも、こっちきてもう3年近くにもなると、共通の話題って昔話だけになっちゃう。あのときどうだった、とかアイツ今何してるのとか。そういう過去の話なんて、そう長く続くもんでもない。

かといって、何か理由が有ってきたのかとおもったけど、そうでもなさそう。ほんとに成り行きでこっちで一泊することになった、って感じだし。

「アルバムだ、みていい？」

「絶対ダメ。」

「けちー。なんでー。」

見られたく無い写真がてんこ盛りだからに決まってるだろう。
お前んとか、まだ残ってるし。

一応お客様だから、取って置きのリーフティーなんぞを……。
「きゃあ、これカノジョ？」
「あ、てめ。」
って、手はなせねー。ティーバッグにしとけば良かった。こんなやつ。

「普通にかわいくて、むかつくー。
……ああ、若かったねー、二人とも。もう捨てたかと思ったよ。キャー照れるー。」
「今すぐ閉じないと、紅茶ぶっ掛ける。」
「はいはい。」

ひょっとして、今晚はずっとこの調子なのか。もうかなり喋って、っていうか
聞かされて、耳がヘトヘトなんだけど。

「家に連絡しないのか？」
「うん。大丈夫だよ。私、不良娘だから。」
不良だから大丈夫だ、というその意味がわかんね。

「付き合ってたときは、そんなこと言わなかったくせに。やっぱり迷惑だった？」
言わなかった？そうか？
いや、女の記憶は自分都合だからな。でも、
「そうじゃないけど、なんか投げやりになって無いかって、心配なんだよ。」
「相変わらずだね、その無神経にやさしいところ。」
ほっとけ、地なんだよ。

いや、無神経じゃなくて、やさしいとこがな。

「シャワーしたかったらそっちのユニット。パジャマは。
うーん、オレのでよかったら有るけど・・・。」
「うん、貸して。あの、ほんと、ごめんね。」

「いいよ、もう。お前はベッドでねてくれ、オレはコタツで寝るから。
明日はバイトだから7：00起きな。」
「ついでに、長い髪とピアス、ベッドの下に残しとこうか？」

相変わらずの悪魔だなお前は！

シャワーの音が止まった。

なんかFMつけてても、耳がそっちのほうに向いてて、それがとんでもない
むなしい努力のような気がする。何してもわざとらしいんじゃないかって。
根性すわってないなー、オレ。
ウチに泊めるって決めたんだろ。

ああもう、何が起こっても知らん！いや決して何も起こしませんけどね。

「お先でしたー。」
シャンプーのにおいが。

「ん、何？」
「バ、バスタオル、もう一枚だそうか？それとドライヤー。」
やべー、うっかり見つめてしまった。

「あーっと、タオルは大丈夫だよ。でもドライヤーは貸して。」
メイク落とすと、昔とあんまり変わらないな。もちろん二人ともいろいろ有って、
外見以上に中身は変わったんだろうけど。いきなり、昔の顔で出てくんよな。

「ねえ。・・・卒業したら、こっちに帰ってくる？」
ドライヤーの音、うるさくって聞こえづらいんだけどな。

「そういうの、そろそろ考えないといけないのは分かってるんだけど。」

「友達とか結構のこってるよ。おソメとか、もう子供出来たし。」
まじか。

「これがまたそっくりでねー。笑えるんだー……。ヨウタさ。
こんなところで一人で生きてて楽しい？」

うーん、あの田舎じゃ公務員か農協ぐらいだよなあ。

ウチはつがなきゃいけない田んぼがあるってわけでもないんだけど。
まあ、親のことは考えないといけないから、あっちに帰るって言う選択肢が無いわけじゃない。

どっちかっていうと、それが一番常識的な路線だと思う。こんなところに
下宿させてもらってたし。

でもなあ、他にも考えないといけないことだってあるんだよな。

まあ、一人ってわけでもないしな、もう。

「シャワーしてくるよ。」

「ねえ、もう寝た？」
眠れねー。

「今付き合ってるのにね、……。迫られちゃって。まあ、男のこの気持ちも
分かるんだけど。……。なんでかなあ、そのときヨータのことおもいだして、
拒否っちゃった。」

おいおい、そんな赤裸々な発言。

「それで、ヨータのこと思い出したら、今度は会いたくなって。
だから今日は、本と楽しかった……。っていうのは独り言だからね。返事なくていいよ。」

なんで僕なんだろうな。
僕じゃなくても、……。オマエもてるだろう。

「泊まるつもりとかなかったの。でもね。楽しくて帰れなかった。子供みたいだよな。」
確かに楽しそうだった。僕も楽しかった。久しぶりだし。

「ヨウタが昔と同じで居てくれて、嬉しかった。」

僕は変わらないの。頑固だから。

「ありがとう。」

それでさ、僕らは、何回こういうこと繰り返しても上手く行かないんだよ、きっと。それがちゃんと分かるまで、同じことを繰り返してしまうかもしれないけど。

田舎が嫌いとかそういうのはないんだ。のんびりしてていい町だと思うし、むしろ結婚して子供が出来たら、ああいうところのほうがいいんだろうと思う。

でもなあ、それは少し先の話で、いまはもっと色々な経験をしたっていうのが強いんだよな。

お前のことは好きだけど、そう思ってしまうと、あの町から離れるのが難しくなるような気がする。

だけど、お前の我が儘には付き合ってやる。それを押し通せないで、中途半端に気を使うようなヤツだからな、お前って。

“無神経にやさしい”なんてきついこと、何回言われたとしてもだ。

「帰ったら、電話しろよ。」

「・・・ヨウタこそ、帰って来い。この町、似合わないよ。」

あーおなかすいた。早く終わらないかなあ。

2講目のパンキョウって本とおなかすくよ。お、時計見たぞ。

“えー、それでは本日はここまでにします。”

よっしゃー。昼休み5分前に終わってくれるのは良心的だよね、この先生。

「千紗あ、学食行く？」

「行くよー。なーに食べよっかなー。」

多分混み混みだろうなあ。あんまりいっぱいだったらやめよーっと。

後ろに立って、“早く席たてよ、おらー”電波出されても、ワタシってさ、食べるの遅いんだよね。

ヨータなんかいつも先に食べ終わって、暇そうな顔してるし。

「レポートのテーマどうする？」

「なにそれ？」

「今言ってたじゃない、後期試験はレポートにしますって。海外出張かなんだかで、試験の時期にいないからって。」

「聞いてなかったよー。」

「ランチのことばっか考えてるからだよ。」

「違います。違うからね。」

「心理学的に言うと、そういう強く重ねて否定することって、本質を突いていることが多いんだよね。」

「マジっ。」

「ふふー、適当に言っただけ。っていうか、それカレシの口癖でしょ。

ああ、もう、口押さえないの。ほんとわかりやすいんだから。」

もてあそばれたー・・・。

「どうせ、お昼うどんにするか定食にするかとか、考えてたんでしょ。」

うう・・・。

「で、どっちにするの。」

「うどん定食。」

「千紗、それ好きだねー。」

「だって、お稲荷さんが二つもついてくるから。」

「幼児かお前は。」

このカフェテリア形式って、なんか便利なんだかメンドクサイのかよくわからないなあ。それに、これだけ込んでるのに注文間違えないおばちゃんたちもすごいよ。わたしなんか、絶対無理。

恭ちゃんとはと、、、いた、服派手だからねー。わかりやすー。

ハイちょっくらごめんなさいよ。通してくださいね。

意地悪すると、うどんのお汁こぼしちゃうよー。

はああ、ボンゴレにサラダね。じゃあ、今日のランチ、きっと油ものだったんだ。

「千紗のカレシって三年だっけ。」

「なにー、いきなり。」

「そろそろだよね、就活。」

という目線の先は、、、をを、就活スーツ。4年かな、今頃スーツってことは、大変って事だ。

「どうするって？」

「聞いたこと無いから、わかんない。」

ふーっふーっ……。聞いたことなかったなあ、、、ワタシってやっぱ幼児？

「田舎帰るとかだったら、どうするの。」

んぐっ。考えたこともなかったし、あまりその話題には触れたくないな。

ヨータが卒業しても、私はまだ一年あるし。田舎行っちゃったら、簡単には会えないだろうなあ。遠距離かぁ……。それ以前にだめになったりして。

わたしたちって、いまいち付き合ってるって実感に乏しいからなあ。

恭ちゃんそれ巻きすぎ。でもって、急いでるからって大口開けて食べるの止めなさい。

「じゃ、ワタシこれからバイトだから。」

「うん。またね。」

ふーっふーっ……。ゆっくり食べよ。あとで、生協の本屋よって、レポートのネタ本探そうかな。

前に座った知らない人には、目をあわさないようにして……。

この服かわいいな・・・って、雑誌見てる場合じゃない。しっかりしろワタシ。
やらないといけないことがあると、余計なことに逃げたくなるんだよねー。
ヨウタにどうするの、なんて聞けるわけ無いって。

マイナスの答えが返ってくるイメージしかわかないもの。

社会学、、、経営学、、、もしヨータと別れることになったら、、、
私、もう一回恋愛できるだろうか、、、つか、本当にしっかりしろワタシ。
心理学関係は確かこっちだったはずだけど。

あ、発見！

「ヨータ！ 何みてるの。」

“地方公務員試験対策”

地方—————！

「そろそろ、準備しようかと思って。」

うわああああ・・・、なんだか、大貧血起こしそう。

「おい、大丈夫か。お前。」

「今日オレ学校行くし。」

“えー、いま試験休みだよ。”

「学生集会有るの。正門ロックアウトしてゲバルト・・・。」

“ちょっと、ちょっと、もうすぐ21世紀だよ。60年代じゃなくて。なにそのゲバ?”

「学費値上げ反対、校地移転反対、あと・・・なんだっけ。」

“学費なんて私ら現役生関係ないじゃない。”

「しょうがないだろ、オレは部の幹事長なんだから・・・。動員かかっているの。」

“なーんか、そういうの、やだなー。”

しょうがないんだって。部費貰ってるんだし、他のヤツに行かせるわけにも
いかないし。

「そろそろ時間だからオレ行くわ。じゃーな。」

“さいてー。”

がちゃん！気分悪ー。

集合場所の学生会館ピロティ前。歩いて10分とかからないんだけどな。

こういうのって近い人間ほど遅く行くって法則がある。高校のときも、
遅刻してくるヤツって、決まって近所のヤツだった。

わ、なんか人多いな、こっから行くのか。メットかぶってるし物々しい。
オレ、ニット帽なんだけどなー。まずかったかなー。

わー旗だ。角材だ。メガホンだ。

「はいー4列縦隊。両側に中央委員並んでくださーい。」

じゃ、真ん中の列で。物々しいな。知り合いじえんじえんいません。

一応歩道とおっていくんだ。道路じゃなくてよかったよ。

ありゃ、何か、・・・え、マジ。マジ、機動隊じゃん！しかもうじゃうじゃいるぞ。
うわーごっつい。肩幅ひろー。道路側完全封鎖！指揮車だ指揮車！

あの上に立ってる人えらいさんかなー。マジ怖えー。

昔ってこんなビーストみたいな連中に突っ込んで行ったのか。

封鎖中のキャンパスって、ほんと人いないな。元もと休みだけどな。

あーケツ冷てー。座蒲団もってこいなんて誰も行ってなかったし。

を――そーだそーだー。意義なーし。パチパチパチ。

わ、なにになに。槍ぶすまだ。そうやって組むの。かっこいい。ジグザグ前進。

うわーこんなの生で見れると思ってなかったよ。

でも、なんか孤立してるよなー。

結局学生自治会と、動員かかった団体の幹部だけだもんな。

こんなのさっきの機動隊が突入してきたら、木っ端微塵だ。まあ、来るわけ無いけどね。

みんな怒ってるんだけどね。こういう方法しか無いのかな。

こういうことしても、来年の新生から授業料は上がって、その何年か後、
広大な校地に新しい校舎群が建つんだろう。もう、学校の成り立ちとは別次元の
経営的理由で、動いてるとしか思えないよ。

けれども、今の校地が残されて、いつかおっさんになってこの前を通ったときに、
ああ、僕もあのことここにいたんだなあって思い出せたらいいのに。

もし何もしないでいて、ここが更地にでもなっていたら、多分一生後悔するって思った。

思い通りに行かないことでも、小さな力でも、ちゃんと声を上げるんだって

決めただ。たとえきっかけが“上からの動員”だったとしてもね。

「よっこらしょっと。」

「あれ？ロックアウト中だぞ。」

こんなやつ入れちゃって、ぬるいロックアウトだなあ。

「寒いねー。あ、空見て、空。青空に雪。きれー。」

「風花だな。比叡山辺りから飛んできたかな。」

「岩倉辺り、凍ってるよきつと。うーさぶいー。」

こら、こんなとこでくっつくなって。

「ね、こうしていると、なんか“いちご白書”みたいだね。・・・クシュン。」

「ん、いちごはくしょん？」

「えー、今の無し、今の無しい。 もう、さいてー。」

はいはい。

そしてこういうときに、一番そばにいて欲しいヤツになっちゃったな、お前って。

ピンポン。

誰だ。

“あたしー。さぶいよ早く開けてー。”

珍しいな、電話もしないでくるなんて。

「いらっしやい。」

「こたつこたつ。バイクさぶくってー。」

ヤバ。

「今の何？何かくしたの。」

「女の子には見せられないもの。」

「マジ、変態？」

ちげーよ。つか、だったらどうするよ。

「ねえ、今年はいつ田舎帰るの。」

「23日。」

ココアどうぞ。マメだなあオレ。

「えー、マジ！なんでそんなに早い。そんなに家に帰りたい？

ええークリスマスどうするの。」

「オレ無宗教だし。」

それ、両手で抱え込んでふーふー吹くのって、子供の冷まし方だな。

寒いんだか熱いんだか、どっちかに観念しろよ。

「あのさー、私たち大学生だよねー。学生にもなってクリスマスに家族といたい？

そんなにママが恋しいの？」

オレの言ってること聞いているのか？無宗教だって言ってるだろう。

それに、

「うち母親いないし。」

「・・・ごめん、知らなかった。」

「いや、オレも特に話さなかったからな。」

まあ、オマエのセイではないよ。

「そういえば、家族のこととか、あんまし聞かないね。」

オマエはべらべら喋るけどな。父親と折り合いが悪いとか。

面白くも何ともない話題だけど、

「うち、共働きだったから、家族が揃うのってあんまり無かったんだ。

でもクリスマスのは、ケーキ囲んでローソク吹き消したりしてたんだよ。

今は、オヤジと妹が田舎臭い街で暮らしてんだけど、だから帰ってやらないと。

・・・オマエも来るか。」

「本気！それ。」

こっくり。

「へー、妹可愛いなの？」

「どうかな。普通だろ。」

「そっかー、可愛いんだ。じゃあ、止めとく。嫉妬しそうだし。家族団欒の邪魔だし。」

「まあ、オレが母親代わりみたいなのもあったし、普通の兄妹よりは仲いいかも。」

それに、一度田舎に帰って、はっきりとさせとかないといけないこともあるし。

「お兄ちゃん優しいねー。そういう事情があるなら諦めるかあ。

と言うことは、初詣もだめだよな。でもよくこっち来れたよねー。」

「うーん。アイツも兄離れさせないと。」

「そっかー、ふーん。私もカレシ離れしちゃおうかなー・・・。」

おいおい。

「焦った？」

ん、ん・・・まあな。

けど、クリスマスと初詣ぐらい、、、ってイベントとしては重要なのかな。

だいたいこいつがそういうのを重要視してるようには見えないんだけど。

でも、やっぱ女の子だもんな。

「ごめんな。」

「ううん、いい、いい。いい話だし。そういうヤツだもんねキミは。」

そういうふうに出られると、ほんと悪くなって気になってくる。

しゃーねーな、いま出しますか。さっき隠したやつ。ごそごそ。

「実はさ、悪いなと思ってこういうの、どう？」

「げ！マフラー。何つー器用な男よキミは。」

いや、昔、妹に編んだこと有ってさ。母親代わりだし。

「変か？」

「ううん、すごく嬉しい・・・けど。」

うん？

「かぶった。あたしのと・・・。」

「ヨータ。鍵貸して。」

「なにすんの。」

「ヨータが田舎に帰ってる間に大掃除してあげる。」

「ん？オレの部屋、汚いか？」

いーえ、ぜんぜんそんなことない。

・・・って言って、無理やり鍵借りた。ただ遊びにきたかっただけだよー。

「どっこも触わんなよ。」っていったけど、それは無理でしょうー！

例えば、、、、このあやしいアルバム。

そーっとそーっと、分からないように引っ張り出して・・・ぱらぱらぱら・・・。

ああ、やっぱりなあ。女のこの写真だよ。

こういう無防備な顔するのって、カレシにだけだよな。

へえーこんなのと、付き合ってたのか。

わたしとはちょっと違うタイプみたい。髪長くておとなしそうで。

くっそー、別れたんだったら捨てればいいのに。破ってやろうかなあ。

・・・やめとこ。

どンドンダークサイドに落ちていきそう。顔が青くなったらやだもんね。

このコート置いてったのか。

高校のときのだとか言ってたけど、ダッフル着るとすっごく子供っぽく見えるんだよね。

よいしょっと・・・うわ、でか！指先しか出ない。

でも、ヨータの匂いがする。

変だよな、男の匂いなんて嗅ぎたくも無いのに、好きな人だとその人の匂いも好きになる。

このまま着て帰ったりして。

って、・・・それじゃ、変態だって。

掃除してあげるって言ったんだから、散らかったままにしとけばいいのに、

ベッドまできちんとしてるのってどうなの？

彼って、いまいち私に心開いてくれないのかな。

うりゃー。ばふっ。

うああ、枕冷たいですう。

静かだなあ。

三日も人がいないと、こんなに寒い部屋になるんだな。

来たら寂しいのもまぎれるかなあ、なんて思ったけど、あまり長居しすぎると、余計寂しくなるかも。

恋愛って、もっと楽しいものかと思ってた。

寂しくて、辛くて、不安で。

“じゃあね”って見送って、一人になったとき、何かがごっそりと抜け落ちたような気持ちになる。

ヨータには故郷が有るけど、私には行くところが無い。

残されるって言うの、少しいつらいな。早く帰ってきて欲しい。

恋愛って、ときどき寂しさを増幅させるんだ。

でも、誰かに思われていると思うと、それがすごく自信になる。

ヨータがやさしくしてくれると、幸せすぎて、きゃああああって言いたくなる。

なんだぞ、ヨータ。

あ、電話だ。

珍しいよね、今時固定電話なんて。

ヨータのお父さんが言ったんだっけ、ケイタイなんか信用ならん！とか。

出ていいのかな・・・あ、切れた。

へへっ、出たらちょっと面白かったかも。

うわあ、今度はケイタイ。

ごそごそ。

「もしもし。」

“今どこ？”

「ヨータの部屋。」

“さっきアルバム見てたろ。”

「えー！なんで分かったの？」

“カマかけたんだよ。てめー、見るなっていったろ！”

なんか、おこられてるのに嬉しいよお。

いつの間にか、窓の外は真っ白になっていた。

“下手したら、東京都内の方が近いんじゃないかな。”って言ってた通りだ。

新快速がいつの間にか、普通電車になってる。

それでも結構お客さんが乗ってるのって、本数が少ないからかな。

とにかく、こんなに高い切符買ったの初めてだ。

電車を降りて、余りの白さと寒さにボーっとしてたら、ホームはあっという間に無人になった。

駅舎に入っても、駅前の広場にももう誰もいない。

タクシーも無い。バスなんて40分後だよ。

“歩いて歩けないことは無いんだけど・・・”って言ってたから、歩いてみようかな。ここにいても凍死しそうだし。

ぶ、ブーツなんか履いてくるんじゃないかった。踵高すぎだよ・・・。

道の黒いところが見えなくなってくるし。

なんだか異様に内股が緊張してる。

他人には見せられない下着着てきたから、寒いって言うより暑くなってきた。

歩いてるうちは凍死しないんだきっと。

とはいうものの、足が、もう、、、うわわっ。

雪の上で助かったー。なんか青い空が見えてるー・・・。

ごーって、上のほうで風の音がしてる。静かだなあ。

よっ、・・・あれ。どっこい・・・あれ。

なんか雪にはまり込んでる。起きれないよー。

ヨーター。私頑張ったんだよー。ここまで一人で来たんだよー。

スコット隊長、もう無理ですう・・・。

このまま雪に埋もれて、美しく死んでしまうのかなあ。

クルマの音だ。

おーい。気づいてー。だれか助けてー。見られたくないのが微妙な気持ちだけどー。

・・・よっしゃー止まった。

“おい、誰か倒れてんぞ。”

ドアの開く音。

「大丈夫ですか。いま、手、引っ張りますから。」

「助かります。」

助かったー。

「おい、ヨータ、そっちの手。」

ヨータ？

「おう。あれ、お前なにやってんの。」

「あうー。」

「あうじゃねー。」

「何、知り合い？」

「いや、こんな恥ずかしいやつ全然しらね。」

ひどい！薄情ものー。

「あ、ひょっとしてこの子か。昨日の夜、飲みながら、かわいいかわいって、げほっ！何すんだてめ。」

どうでもいいですから、早く起こしてー。

で、結局駅前に戻って雪かきボランティアって。。。。。。。

「普段こっちにいねーからな。必然的にこういうときに押し付けられるんだよ。」

それはいいけど、、、、どうしてワタシ振り出しに戻るの。

私のこれまでの苦勞、なにっ？！

「ケイタイすれば迎えに来てやったのに。」

“ヨータ、昨日、ウチに忘れてったろ。”

「あ、そうだっけ。」

ぼけなす。

「すみませんね、軽トラで。でも、これが一番いいんですよ、はまっても軽いからすぐ抜け出せるんです。」

「いいえ、ありがとうございます。」

ほうー、こんな狭いところでも二人のれるんだねー。

“早く出せよ、寒くて死にそうぞ。”

「前に3人はきついですからね。」

だからヨータは私のマフラーをぐるぐる巻きにして、荷台に乗ってる。

「まあ、そんなに遠くじゃないから。」

っていったけど、この雪道をこのスピードで走ってこれだけかかるってことは、私が歩いたのって相当無謀だったんだ。

「歩ける距離って聞いてたんですけどー。」

なんか叫んでるみたい、わたし。

「農道通ればね。細い道は危ないから、回り道して本道だけ走ってる。」

そういうことか。

「じゃな。」

「おう、お疲れ！ さぶー。歯あ、ガチガチゆってる。」

なんだか雀みたいに走ってた。田舎道に似合うなー、軽トラくん。

「その靴だときつかったろ。もうちょっとだけど、腕掴まれ。」

華奢そうに見えるけど、案外腕太いんだよね。そういうと、畑仕事で鍛えてるからなって、笑ってた。

この道も、多分夏だったら軽トラくんも通れたんだらうけど、屋根から滑り落ちた雪が道を細くしている。

「何回転んだ。」

「3回ぐらいかな。」

「へえ優秀だな。」

ほんとは6回です。お土産ぐちゃぐちゃになってないかな。

「で、なんで来たの。」

そんなの、ヨータの顔が見たくなかったに決まってるじゃない。

「家とおせちに飽きた。」

「は——ん。・・・すごいところだろ、ここ。」

「うん。ゴーストタウンかと思った。人すんでるんだよね、この家とかこの家とか。」

一軒一軒大きいなあ。とにかく庭が広くてびっくりする。

こっちの集落から向うの集落まで、なーんにもない。雪原？アラスカ？

立ち止まった。

ここなんだ、きっと。どっきんどっきんしてきた。

「千紗。俺んち嫁に来る気か。」

まっ・・・・・・・・・・・・・・・・・・白！

何、いきなりそんなこと言ってんの。

「お兄ちゃん。何してんのそんなところで。」

か、かわいい。どてらなんか着ちゃってる。

「ひょっとして、その人、大学のカノジョ？」

「あ、あけましておめでとう。」

「あ、おめでとうございます・・・・って。

ええ————！おとーさん、おとーさん。お兄ちゃんが女の人連れてきた。

どうしよー。」

「あの、バカ。大声出して走んな。近所に丸ぎこえ。」

・・・・でもね。

「あたし、ここってすごくいいとこのような気がするけど、ここに住むのは無理かな。」
言っ、ちゃっ、た。

「そうだろうな、オレもそう思う。」

なんか、お正月早々先が見えちゃったかな。

これだから経験不足って、だめなんだよ。気持ちだけで走って、失敗しちゃったなあ。

なんだか、がっかり来た。

「よし、いい機会だからオヤジに話すか。」

何を？

「オレ、京都で就職するって。」

「え、だって“地方”公務員試験で。」

何、そのあきれた目。

「ばーか、京都市だって府だって“地方”だろ。」

「あ。」

「これだから京都人は、、、。

こっちの採用なんて、一人か二人だぞ。そこへオレなんかが割り込んだら、こっちのヤツが迷惑するんだよ。」

「じゃあ、私のために？」

ど、どきどきどき……。心臓うるさい！

「そうじゃねーけどな。でも、そういうことだ。」

なーに言ってんだか。

“おとうさん。着替えた？かっこ悪いのやだからね、私一。”

「妹、かわいいね。」

「土産なに？」

「おたべ。」

「チョコかなんかにしとけよ。前に残って、ぶーぶ一言われたんだから。」

「チョコ入りだよ。」

「そんなのあるのか！」

「メロンとか、イチゴとか。君、京都暮らしが全然板についてませんなあ。」

「そんなこというと手はなすぞ。」

「あ、だめ、それはダメ。手、離さないで。」

“お兄ちゃん、デレてないで早く紹介してよー。”